1972年1月　天　気　Vol. 19, No. 1

巻頭言

理事長　山　本　義　一

1971年11月10日から13日にかけて，Air Mass Transformation Experiment (AMTEX) の Study Conference が気象庁で開かれた．JOC 代表としての副会長 Stewart 博士をはじめ，濠州の Dyer 博士，カナダの McBean 博士，米国の Lenschow 博士が，それぞれの国の National Committee の代表として参加し，また日本からは GARP 小委員会および測地学審議会の委員を含めて三十数名が参加して，有意義な論議を重ねることが出来た．

ことに米国からは4発の大型観測用航空機の参加が期待され，濠州，カナダもそれぞれ観測に参加の希望を表明されたことは，この計画が国際協力観測として内容が充実される意味で，われわれにとって大きな喜びであった．ただこの会議にソ連の参加がなかったことは遺憾であるが，今後ソ連にも一層強く AMTEX への参加をよびかける方針である．

会議では AMTEX に対する日本の原案が承認されたが，その論議の過程において，相当辛辣な批判があったことをお伝えして，われわれの AMTEX に対する基本姿勢を正す上に他山の石としたいと思う．

外人参加者の批判を要約すると，つぎのようになる．気団変質の実態を把握し，medium scale の擾乱の発生，発達の機構を解明するという AMTEX の目的，ならびにそのために南西諸島海域で観測を行なうという日本側の考えには賛同するが，具体的な日本の観測計画案を見ると，そのような海面状況の変化の烈しい海域で行なう計画としてはちと空間的な観測網の配置が粗すぎるのではないかということが第1点である．もともと日本案の欠点である航空機観測の不備な点は米国の参加に期待するほかに方法はないが，Stewart から日本に出来ることとして，商船や漁船の活用を考えるようにとの提案があった．この点は TROMEX でも十分考慮されているとの事であり，今後日本側としても検討すべき点の一つであろう．

つぎに Cloud Physics の観測計画についての批判であるが，学問としての Cloud Physics の重要性は十分認めるが，AMTEX の目的達成という立場からすると，この計画はあまりにも Cloud-physical な観測にまで立入るべきではないというのである．同じ趣旨のことは放射観測についてもあてはまるであろう．このことは指摘されるまでもなく本来当然のことなのであるが，研究費に乏しい日本では若干この機会に気象の全分野がうるおうようにしようという意図があったことはいなめない．この点は今後 GARP 小委員会等で十分検討すべき問題点であろう．

第3点は日本の計画はあまりにも air-sea interface の研究に重点が置かれすぎているという批判である．外人参加者のうち Stewart, Dyer は共にその方面の著名な研究者であり彼等としては air-sea interface の研究がまだ不十分なことは重々承知の上で，なおかつ上のような批判をしている点は傾聴に値すると思う．その基本的発想は，air-sea interface の観測班がみな精密測定をやるよりも，conventional な方法でもよいからもっと観測点をふやすこと，および更に重要なことは日本側でも出来るであろう Planetary Boundary Layer の観測にもっとも重点を指向することが必要ではないかというのである．日本側でもその重要性は以前から論じられていたのであるが，それに要する研究費調達に対する不安感から，つい手慣れた観測に走るという結果をまねいたものであり，また一面 JOC が air-sea interface の subprogram として AMTEX をとりあげていることに対する日本側の若干の誤解もあったかと思う．この点も今後 GARP 小委員会で検討すべき問題点である．

今回の会議で外人参加者が AMTEX に強い関心を示し，積極的に参加の希望を表明すると共に，日本の原案をより良いものにしようという意図のもとに率直な見解を表明してくれたことに対して，深く敬意を表明するものである．わが国の気象界として，自ら leadership をとって行なうこの初めての国際協力計画を是非成功させたいものである．